

## 第1章 開会の挨拶

所長 木谷 信之



## 第1章 開会の挨拶（所長 木谷 信之）

おはようございます。足元の悪い中、たくさんの方にお集まりいただき、大変光栄に思っております。

ご承知のように、国総研、平成13年に発足いたしまして、今年で15回目を迎えます講演会に来ていただきまして、大変ありがとうございます。

国総研は大正11年に、当時の内務省の試験所として発足いたしまして、土木研究所を経て、国総研という形になっております。いろいろな国土交通省の抱える技術的な問題について研究を行い、技術基準ですとか、技術の関係する政策の立案に寄与するという役割を担っております。

今年は、先日の鬼怒川の破堤を含む災害、水害がございましたし、そういった面での技術的な検討、今週月曜日には水管理・国土保全局のほうから答申案が出まして、粘り強い堤防にしていくとか、災害が発生したときに的確に避難していただけるような体制をつくっていくとか、そういったことに関しまして、いろいろな面から提言をいただき、その技術的な局面をどうしていくかというようなことを一つのテーマとして、今回の講演会を組み立てさせていただいております。

プログラムをご覧いただければおわかりいただけると思いますが、今年からセッションを分けさせていただきました。最初は、今、申し上げました防災・減災にかかわる技術、今ちょっと触れました「洪水危険度見える化プロジェクト」を初め、担当部長のほうから詳しくご説明をさせていただきます。

その後、維持管理でございます。維持管理は、笹子トンネルの事故を契機に、インフラの老朽化ということで点検を行い、的確な修繕をやっていかないと、長期的なインフラが維持できないだろうということで、PDCAサイクルをどのようにつくっていくのかということで、点検そのものも、どのような点に着目して、どのような頻度でやったらいいのかということ、これは政省令に位置づけましたけれども、それをつくるときの技術的な側面、あるいは実際に実行していく上で技術的な面、あるいは新しい技術、ICT等を活用して効率的に点検をしていく手法、そういったものの開発が非常に重要になってきております。

それと同時に、多くのインフラが県ですとか市町村が管理してございます。どうしても技術力に不安があるものですから、そうした技術的な支援ということ、国総研が中心になって取り組まなければいけないだろうということで、昨年、地方整備局の職員を転勤させて、うちの職員として活動いただき、ここで一定期間勉強していただいて、地方整備局に戻り、各地の自治体、あるいは地方整備局の職員に指導していただくというようなプログラムをつくりまして、そういった点検する人材育成というような面にも今後取り組んでいかなければいけないですし、一所懸命、取り組み始めたところでございます。

あと、セッションの最後にイノベーションということで、お昼から、石田先生にもイノベーションをテーマにご講演をいただくことにしております。我々の社会資本、これまでと異なってくる部分がたくさんあります。新しい技術がいろいろな分野で開発されておりますので、特にICTの分野をいかに活用して、効率的に行っていくか。あるいはこれまで以上に精度が高められないかとか、

いろいろなことが可能になってくるわけですので、技術革新だけではなくて、社会システムそのものもイノベーションしていく。そういったことで、何をやっていかないといけないのかというようなことも研究をしているところでございます。

そういったことをご紹介させていただきたいということで、本日、計画をさせていただきました。5 時までの長い時間でございますけれども、皆様のお役に立てればということで、本日はよろしくお願いいたします。